



幸せあふれる三浦さんファミリー

絆深める「美しい桜」 府中国立の三浦康廣さん

「美桜」という名の由来は、夫婦ふたりとも桜が好きだったから。まず康廣さんが候補

妹できてから
責任感出てきた

またしても不自由な日常を強いられた2021年。「何かいいことないか」と示やいた日々を別れを告げ、今年こそ良い年でありますように…

府中国立支部の鶴代分会で
分会長を務めている三浦康廣
さん(36歳)宅に、2021

年10月2日、新しい家族が加
わりました。長女的美桜(み
お)ちゃんが誕生したので

あやかりたい めでたい出来事があつた仲間



激闘約40分の末に釣り上げた

目黒の斉藤勇太さんは4度目で 58kgのオダモン釣った

「ギハダを狙って数年も釣れない人もいるのに、始めて約2カ月でオダモン(小田原モンスター、50kg超のギハダマグロ)を釣ることができて本当にラッキーでした」とこ

ばれる笑みの目黒支部の斉藤勇太さん。大工です。
11月2日は4回目のチャレンジでした。小田原市の早川港で坂口丸に乗り早朝6時に出航、同乗者は支部の書記、日下解人さん、山本雅人さんのほかに5人ほど。斉藤さんが陣取ったのは左舷のトモ(船尾)でした。沖上がり(終了時間)が迫る午後1時ごろにヒット。そこからギハダとの格闘が始まります。「ギハダが走ったらドラグをゆるめ、弱ったら締めるドラグコントロールの繰り返しでした。電動リールでなかったこともあって疲れきり、同行した日下さん、山本さんに助っ人をしてもらいました」。



取材後においしく頂きました(編集部)

斉藤さんに一つ不安がよぎります。「私のリールにはライン(道糸)は400mしかありません。それ以上走られたらバレーしてしまいます」。激闘約40分、黒っぽく見える巨体が現れました。釣ったギハダは58kg、オダモンです。「誰かにかかって取り込み



「地元を大事に、続けたい」と滑川さん



海の森水上競技場でのパフォーマンス

江東の滑川達大さんは 東京五輪で葵太鼓

をしている間、他の釣客は仕掛けを落としてはいけません。同乗者が見守るなかです。『こうやって釣れるのではないかと自分なりに考えるのが楽しいですね』。

リールをプレゼント
されたから

ギハダ釣りのきっかけは、以前勤めていた工務店の社長から、「(アパートの新築の仕事をお願いして)頑張った

から」とマグロ用の高価なリールをプレゼントされ、あわせて坂口丸を紹介されたことからです。2回目はハリスが切れてバラし、3回目はかかったと思っただけで、なんとサメ。そして11月2日にオダモンを釣り上げました。「ギハダのシーズンがほぼ終わりですが、これからさらに大物を釣りたいですね」と斉藤さんは目を輝かせて話してくれました。

「最終日は雨になりましたが、最後だからと太鼓の演奏をやり通しました。無観客でしたが若い子にもいい経験になりました」。江東支部深川第3分会所属の滑川達大さん(69歳・内装)が昨夏の出来事を思い出しながら話してくれました。

深川富岡八幡葵太鼓は今年の5月にはチャリティーコンサートを中野ゼロホールで開催します。コロナで中断しましたが、中越地震の被災者支援のチャリティーコンサートとして続け、東日本大震災のときには富岡八幡様の前で募金集めを行ない、岩手県山田町の方へ寄付をしました。地元を大事にして、深川には葵太鼓があると言われるように続けていきたい」と、滑川さんは目を細めました。

を務める深川富岡八幡葵太鼓に、東京五輪のボート競技開催にあたって、パフォーマンスとして演奏をしてほしいと東京2020組織委員会から依頼がありました。その後、新型コロナウイルスが広がり、東京五輪が無観客開催になると決まった時には、この話はなくなくなったと思いましたが、改めて正式に依頼され、演奏することが決定。当初は1週間演奏してほしいと思われ、さすがにそれはきついと思っ

今年5月には 中野ゼロホール

「美桜」という名の由来は、夫婦ふたりとも桜が好きだったから。まず康廣さんが候補妹できてから責任感出てきた